

古典研究会 研究発表

是為論^{これ ろん な}～是を論と為す～⑱

『打手要言』第2段(その2)

前回記事で『打手要言』第2段落目の本文と意識文をご紹介します。今回は、読み下し文とともに、この文献の概略についてお伝えします。

※1文ごとの解釈について内容を確認したい場合は、前月号(『太極』256号)の「是為論」の意識文をご覧ください。

【読み下し文】解曰く。身は動くといえども、心は静を貴ぶ。気は須らく^{おさ}斂めるべし。神は宜しく^{のば}舒すべし。心は令を為し、気は旗を為し、神は主帥を為し、身は驅使を為す。刻々留意すれば、方に得る所有り。先に心在りて、後に身在り。身在れば、すなわち^{まさ}手のこれを舞い足のこれを踏むを知らず。所謂、一氣呵成、捨己従人、引進落空、四両千斤を撥くなり。

須らく知るべし、一動すれば^な動ならざる無し。一静すれば静ならざる無し。動を猶^な静のごとく視て、静を猶動のごとく視る。内は精神を固め、外は安逸を示す。須らく人に従うを要すべく、己に由る^{たつと}を要さず。人に従えば則ち活き、己に由れば則ち滞る。気を尚ぶ者は力無く、気を養う者は純剛なり。彼動かざれば己動かず。彼微動すれば己先に動く。己を以て人に依り、務めて己を知るを要す^{すなわ}。乃ち能く転に随い接に随う。己を以て人に粘じ、必ず須らく人を知るべし。乃ち能く後にならず先にならず。

精神を能く提起^{おそ}こし得れば、則ち^{おそ}双重の^{おそ}虞無し。粘依は能く^{した}跟い^{した}霊を得れば、方に落空の妙を見る。往復は須らく陰陽を分けるべし。進退は須らく^{おそ}転合有るべし。機は己より発し、力は人より借りる。発勁は須らく上下相隨すべし。乃ち一往すれば敵無し。立身は須らく中正不偏なるべし。能く八面を^{おそ}支撐す。

静なること山岳の如し。動なること^{こと}江河の若し。邁く歩みは淵に臨むが如し。運動は糸を^ひ抽くが如し。蓄勁は弓を張るが如し。発勁は^や箭を放つが如し。行気は九曲珠の如くすれば、微かにも^{くた}到らざる無し。運動は百鍊鋼の如くすれば、何なる^{くた}堅きも摧げざらん。形は^{はくと}搏兔の^{こつ}鶻の如し。神は^ほ捕鼠の^そ猫の如し。

曲中に直を求め、蓄えて後に発す。収めることは即ち放つことなり。連なりて断たず。柔軟を極めて、然

る後に能く堅剛を極む。能く粘依して、然る後に能く靈活す。気は直を以て養いて害無し。勁は曲を以て蓄えて余り有り。漸く物来れば順応するに至る。是れまた^{とど}止まるを知りて能く得るかな。

『打手要言』第2段落目は、別名『太極拳解』と呼ばれているほか、『打手要言』の1～3段落が『十三勢行功心解』として紹介されることもあります(『太極』251号参照)。このように形を変えつつ読み継がれてきたのは、動作の要領について分かりやすく核心をつく言い回しや、精神のあるべき状態が端的に解説されているからでしょう。

この文献では、意(心)と身(体)の関係性を把握し、誤った動きにつながらないように要求しています。体が動く前提として、必ず先に意(心)の導きがあるべきです。『打手要言』第1段(『太極』254号参照)にも「**心為令。氣為旗、神為主帥、身為驅使。所謂意氣君來骨肉臣也**」という表現があり、この第2段落目にも類似表現があります。先に意(心)の指令があり、そして気が奮い立って方向性を示し、神が統率し、肢体がコントロールされ、勁を発します。身は驅使されるだけで、肢体などが自ら威勢よく突き進むではありません。

精神状態が体外、眼光に表れた様子を神と言います。この文献では「静なること山岳の如し」のように、人の様子を山岳、江河などの悠然たる大自然や、^{はやぶさ}隼、猫などの動物の様子になぞらえています。また力(勁)の経路を弓箭の動きに見立てるなど、イメージが湧きやすい比喩表現で書かれています。

心を静めて意識を集中し、相手に従いながら軽靈に動くことができれば、高度な技を生み出し、一氣呵成、引進落空、四両撥千斤などの要領を実現します。それには陰陽を分けること、姿勢は中正を保つこと、上下相隨すること、相手に粘着して逆らわないことが大前提です。

この文献の中に「**極柔軟。然後能極堅剛。**」とあり、極めて柔らかくすることで、のちに極めて堅固になると書かれています。威勢よく意気込めば、心身とも固くなり、重心が居ついて^{おそ}双重の病に陥ります。相手を揺るがす強さは、自分が柔の立場で、冷静に相手に従ってこそ得られます。

※次回は『打手要言』第3・4段をご紹介します。
する予定です。

協会ホームページには過去の回もすべて掲載しています。QRコードを読み込んでご覧ください。

